

研修報告書 No.22

所 属： 東京大学医学部附属病院

氏 名： 齋藤 晟太郎

研修先： 大井田病院

高知県宿毛市の大井田病院で 2023 年 2 月 1 日から 28 日まで研修をさせていただきましたので、報告をさせていただきます。

私は大学時代を高知県で過ごし、その後は東京都内で初期研修を行っておりますので、その視点を交えつつ、地域医療の現状について記載させていただきたいと思います。

そもそも地域医療とはどのようなものなのだろうと高知県の地域医療構想についての記事を参照しましたが、究極の目的は医療や介護が必要な状態となった県民が、住み慣れた地域で生活を続けられることがまず重要なのだと感じました。それを踏まえて今回の実習を振り返ったとき、地域の特性が現れるとすれば、住民の年齢や食生活、職業や居住環境などについて理解を深めることは大切であると考えました。

大井田病院での研修についてですが、主に外来と訪問診療を経験させていただきました。外来は内科、外科、小児科、皮膚科に分かれていました。私は血液内科志望のため、内科外来を経験しつつ、外科外来の手技などにも参加させていただきました。内科外来では主に高血圧症や糖尿病といった生活習慣病を背景とした患者さんの経過をみました。年齢は比較的高齢の方が多く、100 歳以上の方も診察しました。また患者さんの職業については、例えば漁師であったり農家の方であったりと、都内の大学病院で診察する患者さんとは背景が異なっていたことが印象的でした。

私が大学時代に過ごしていたころの大好きな高知県に対する印象は、ひろめ市場や土佐赤岡どろめ祭りの大杯飲み干し大会に代表されるようにお酒が好きな方が多く、食事としてはうづぼのから揚げやカツオのたたきなども有名であり、また都内に比べれば車社会であることから歩行距離は比較的少なめなのではないだろうかというものでした。こういった地域の特性を想像しながら外来での医療面接を考えていくことも地域医療では大切なかもしれないと思いつつ診察を重ねました。

例えば職業に着目すると、漁師の方で船に乗っている時期と乗っていない時期とで HbA1c の値に変動がある方がいました。長期間でグラフを描いてみると現在は上昇傾向にあると考えられる数値であってもそれは例年のことであり、以降は改善することが予想されました。この場合この方には目の前の数値にとらわれて加療するだけではなく、現在の仕事内容などに関する状況を伺うことも重要な質問項目であるのだろうと実感しました。これは農家の方にも言えることであり、気候の影響を受けやすい職種の方が多い地域ならではのことであったと感じました。

次に訪問診療についてですが、訪問診療では患者さんのご自宅を訪問し、前回の診察からの経過をお伺いし、診察を行うことが主な流れでした。診察についてはバイタルサインの測定や身体診察、採血に加え、超音波検査や単純X線写真の撮影もポータブルで行えることが印象的でした。さらに大学病院での診療と比較し、実際に患者さんをご自宅に帰られた後、どのような生活を送っており、また誰が生活を支えているのかといったことについてより具体的に学ぶことができました。例えばベッド上で生活を送られている方であれば、原疾患による症状に加え、褥瘡や陥入爪といった長期臥床に伴う症状を伴っている方もいらっしゃいました。体位の変換や衣類の交換などにも力が必要であり、退院された後にご家庭で過ごされるにあたっての課題について考えるきっかけとなりました。また人生初の看取りを経験させていただいたのも、往診の場でした。終末期の方がご自宅で最期を迎えることについて、緩和ケアも含め今後私自身が医師としてどのようにして学び経験を積んでいくのかということについて時間をかけて考えることができたのも、高知県の人柄の温かさと緩やかな時間の流れがあったからだと思います。

最後になりましたが、この度は貴重な機会を与えていただき誠にありがとうございました。様々な方に支えられ、最高の研修であったと感じております。高知県での地域医療研修での経験を活かし、今後に生かしたいと思っております。